

巻頭言

ラテン語のアフォリズムに「大砲がうなりをあげるときミュースは沈黙する (Inter anna silent Musae)」というのがある。説明するまでもないが、戦争が起きると芸術・文化は二の次になるという意味だ。

2022年、ロシア軍がウクライナに侵攻し、ブチャで虐殺をおこなったことがほぼ確かとなったとき、「ブチャの後で詩を書くことは野蛮ではないのか」というテオドール・アドルノに倣ったフレーズが現れた。後頭部を撃たれた遺体と聞けば、パウル・ツェランの母がウクライナにあったナチの収容所において同じ方法で殺されたことや、アンジェイ・ワイダ監督の『カティンの森』(何千人ものポーランド将校が同じ方法でソ連兵に殺された事件を描いた作品)が思い起こされる。

スヴェトラナ・アレクシエーヴィチが「人間からくげだもの>が這い出してきた」(2023年1月1日付『朝日新聞』)と語ったのも、おそらくブチャの虐殺を念頭に置いてのことだろう。まさに言葉を失うしかないような状況である。

しかしそんな中であっても、いや、そんな中だからこそというべきか、すでにこの戦争についての詩がたくさん書かれている。たとえば、2019年に来日した詩人ヴェーラ・パヴロワは、毎日日記をつけるように詩を書いているという。

集会場でもなく、拘束された場でもなく、
地下壕でもなく、戦場でもなく
私は痛みにインタビューする。
いま主要なジャンルはインタビュー。

パヴロワは、避難民、暴力の被害者、爆撃のもとで中庭に親族を葬った人、地下壕に隠れていた人などに話を聞くと述べている。自分の詩の声について、以前は抒情的なソプラノだったが、今はドラマティックになり、民衆の「歌い叫び」に変わったという。抒情からドキュメンタリーへ。人々の証言を取るという手法は、アレクシエーヴィチが長年続けてきた独自の文学的創造のプロセスに他ならない。

また、戦争開始から2か月にしてテルアビブの出版社から刊行されたという詩集『目撃者と証人——戦時の年代記』は26名の詩人たちの作品が収録されているが、タイトルが物語っているとおり、この戦争の実態を詩の形で記憶にとどめようという意図が込められている。ここには怒り、恨み、痛み、皮肉など詩人たちのさまざまな声が響きあっている。「詩による証言文学」と呼んでもいいかもしれない。

思えば、かつて2015年8月7日に、私たちはアンドレイ・クルコフ(ウクライナ)、ミハイル・シーキン(ロシア/スイス)、ドゥブラフカ・ウグレシッチ(クロアチア/オランダ)、多和田葉子(ドイツ/日本)の各氏を迎えて「スラヴ文学は国境を越えて」と題する国際シンポジウムを開催した。そのとき発したメッセージは次のとおりだった。

「大砲がうなりをあげるときでもミュースは沈黙しない」

これはロシアがクリミア半島を併合した翌年のことである。当時と現在は地続きなのである。

総合文化研究所長 沼野恭子

